中瀬有紀

照明家ブラッドリー・キング



Josh Groban and the Cast of NATASHA, PIERRE & THE GREAT COMET OF 1812

照明家ブラッドリー・キング氏にお会いするのは5年ぶりでした。彼は昨年、『ナターシャ・ピエール・アンド・ザ・グレート・コメット・オブ・1812（ザ・グレート・コメット）』で第71回トニー賞のミュージカル照明デザイン賞を受賞されましたが、穏やかな笑顔と人あたりのいい物腰、そして自信を感じさせる落ち着いた口調は以前とまったく変わりません。確かにトニー賞受賞は大変名誉ある功績ですが、彼にとってはキャリアの通過点に過ぎず、受賞した事実よりも、やりがいのある仕事に巡り会えた運命と、良い仲間とのコラボレーションの結果に満足しているという印象を受けました。

『ザ・グレート・コメット』の初演は2012年の秋、99席のオフオフブロードウェイ劇場アーツ・ノヴァでした。グリッドまで9尺5寸のブラックボックス劇場に3尺高のプラットーフォームが設置され、その上で演じる役者とグリッドの間に照明器材を吊るスペースがないという制限で生まれたのが、裸電球とシャンデリアとテーブルランプで構成する照明デザインです。裸電球は飾りではなく役者を照らす意味のある明かりとして存在したからこそ、演出の要求を満たしたのでしょう。この概念は、後に劇場を移し予算と客席数が増えてもぶれることはありませんでした。

アーツ・ノヴァでの公演を大盛況のうちに終えた『ザ・グレート・コメット』は、2013年夏から2014年の春にかけてマンハッタン内の2カ所で仮設テントの公演を成功させます。テントのタッパは先述の劇場より1尺高い10尺5寸で、ムービングライトがキング氏のデザインに加わりました。たくさんの役者が代わる代わる歌う曲中で、観客に誰が歌っているのか知らせるのも照明の役割であり、フォロースポットのないテントでの公演では、後のブロードウェイ公演よりも多い照明キューがあったとキング氏は言います（ちなみに、ブロードウェイ公演のオープニング・ナンバーの照明キューの数は約200）。電球の白から放電管の白への移行は、アコースティックからエレクトリックに移る音楽の変化を視覚化するのに用いられました。

その後2015年冬、ボストンにあるアメリカン・レパートリー・シアターでの公演が決まったとき、キング氏はこの作品がブロードウェイに行くと聞かされます。伝統的なプロセニウム様式の劇場をエクスペリメントな空間に転換する実験もここで行われ、照明デザインにはフォロースポットが加わりました。2016年の秋から1年間、インペリアル劇場で行われたブロードウェイ公演では、MAC Viper 含む約1,000台の照明器材が使用され、裸電球は巻き上げ機によって昇降が自動プログラム化されました。MAC Viper器材間の色の誤差を最低限に抑えるため、4週間に一度新しい電球に交換するのもブロードウェイ公演ならではの贅沢です。インペリアル劇場は建物入り口からすべての内装にデザインが施され、ニューヨークの劇場という跡形が皆無でした。莫大なリサーチと実験をもとに生み出されたデザインに違いありませんが、その唯一無二の創造を実現化する予算と理解が特に交渉なしに提供されたことには驚きました。

「すべてがスムーズだった」とキング氏は『ザ・グレート・コメット』を思い返します。他のミュージカルが舞台稽古に6週間費やす中、6日間の舞台稽古でプレビュー公演を開幕させた『ザ・グレート・コメット』は、照明チームを含む制作者の結束の固さを証明しています。昨年末、ご夫人との間に2人目の女の子を儲けた彼の人生は、まさに『ザ・グレート・コメット』のように順風満帆です。